

ことばがつかえたり、ことばがすぐに出てこなかったりすることを  
吃音きつおんといいます。吃音きつおんとはどういったものかをまず理解りかいし、吃音きつおんのある  
お子さんの支援しえんを考かんがえるためのページです。

ことばがつかえたり、ことばがすぐに出てこなかったりする人ひとに出  
会あったことはありますか。その人ひとたちのことをこんなふうにおも  
はありませんか。

「あわてて話はなそうとするから」

「緊張きんちようしているのだろう」

「気きが小ちいさいから」

「自信じしんがないから」

「悩なやみやストレスがあるのだろう」

「親おやのしつけや育いくじ児もんたいに問題があるのだろう」

そして、どのようにかかわっていけばよいかについては、

「話はなし方かたにいっさい触ふれないようにすれば、やがてはおさまる」

「小ちいさいころにどもっても、大おとな人ひとになればなおる」

「ゆっくりと話はなしかける」

「しつけをきびしくしない」



「ストレスをへらす」

「ゆっくり<sup>はな</sup>話すようにうながす」

「<sup>き</sup>気づかないふりをする」

などなど…、まわりから<sup>い</sup>言われたことはありませんか？

ここにあげましたことは、<sup>きつおん</sup>吃音の<sup>げんいん</sup>原因でも、<sup>ただし</sup>正しい<sup>かた</sup>かかわり方でもありません。ですが<sup>せけん</sup>世間では、このように<sup>かんが</sup>考えられていたり、アドバイスされたりしがちです。つまり、<sup>きつおん</sup>吃音は、<sup>ごかい</sup>誤解されたり、<sup>あや</sup>誤ったかかわり方をされやすいのです。そして、その<sup>ごかい</sup>誤解や<sup>あや</sup>誤ったかかわり方によって、<sup>きつおん</sup>吃音の<sup>しょうじょう</sup>症状を<sup>あつか</sup>悪化させてしまうことが多いのです。

まずは<sup>きつおん</sup>吃音の<sup>りかい</sup>正しい<sup>ひつよう</sup>理解と、<sup>しえん</sup>必要に応じた<sup>はや</sup>支援をできるだけ早くから<sup>おこな</sup>行っていくことが<sup>じゅうよう</sup>重要です。何もしないまま、「しばらく<sup>ようす</sup>様子を見まよう」や、「<sup>いっさい</sup>一切、<sup>ふ</sup>触れないようにしましょう」は、<sup>たん</sup>単なる<sup>ほうち</sup>放置にすぎません。<sup>し</sup>知らず<sup>し</sup>知らずのうちに<sup>しょうじょう</sup>症状を<sup>あつか</sup>悪化させてしまうことにもなりかねません。<sup>ただ</sup>正しい<sup>きつおん</sup>吃音の<sup>ちしき</sup>知識と、<sup>かた</sup>かかわり<sup>し</sup>方を知った<sup>うえ</sup>上で「<sup>ようす</sup>様子を見ましよう」とすることは<sup>うんでい</sup>雲泥の<sup>さ</sup>差です。

<sup>きつおん</sup>吃音というもの、そして<sup>きつおん</sup>吃音のある<sup>こ</sup>子どもさんにどうかかわっていけばよいのかを  
<sup>いっしょ</sup>一緒に<sup>かんが</sup>考えていきましょう。



## 1. 吃音とは

吃音とは、なめらかに話すことができない状態を指します。「流暢性の障がい」と表現されることもあります。吃音はかつて、「どもり」と言われてきましたが、過去にこのことばを用いた「からかい」が多発したことから、いまは公には使われなくなりました。しかし、「どもる」という言い方は使ってもかまわないことになっています。「どもる」とは、話し方の現象を表すことばであるためです。

吃音のある人たちが集い、活動する自助グループ（セルフヘルプグループ）のなかには「どもり」という言い方を積極的に使っていきたいと考える人たちもいます。

## 2. 発症率、有症率

吃音の発症率の調査では、5%前後という結果が報告されています。つまり、100人のうち5人は生涯のどこかでどもった経験があるという意味です。有症率の調査では、1%前後という数値です。つまり、人口100人のうち現在もっている人は1人くらいいるということです。こうしてみると、有症率は発症率の約5分の1になり、生涯のある時点において吃音を経験した人たちのうち、約8割の人の吃音症状は消失したと考えられます。しかし、約2割の人は、吃音とともに生活をしていきます。また、吃音は人種・言語・文化を問わず、共通して生じることばの症状なのです。

### 3. 男女比

吃音のある成人の男女比を調べた研究では、**約4対1で男性に多い傾向**があると報告されています。どもりはじめて間もない幼児期の男女比を調べた研究では、約1～2対1の割合であると言われており、成人のように大きな差がないことが知られています。つまり、女子は男子に比べ、吃音の症状が消失しやすい、つまり自然に治りやすいことを表しています。

### 4. 吃音の原因

**吃音の原因は、まだ特定されていません。**最近の脳機能研究などの成果で、吃音になりやすい神経学的な基盤があると考えられるようになってきており、何らかの「素因」をもつ人に、発達の・環境的なさまざまな要因が影響し、吃音を発症するのではないかとされています。しかし、吃音といえどもさまざまなタイプがあり、一様に共通する原因と言えるものはいまだに明らかにはなっていません。したがって、こうすれば必ず治せるという確かな治療方法がないというのが現状なのです。しかし、吃音をよく知らない専門職の人から安易な考えや意見を言われてしまい、そのことで吃音のある人や保護者・家族が困惑し苦しめられることとなります。

**吃音の発症原因として誤解されているものがあります。**

その1つが「ストレス説」です。下にきょうだいが生まれた、引っ越しをした、

ともばたら こ じゆうぶん じかん にゆうえん ぎょうじ なら こと  
 共働きで子どもと十分にかかわる時間がなかった、入園や行事、習い事などの  
 せいしんてきふたん げんいん かんが はやくち はな しか  
 精神的負担が原因だと考えられがちです。また、「早口で話しかける」「叱りすぎ」  
 おや よういくたいど むす ほごしゃ とく はおや  
 といった親の養育態度やしつけと結びつけてしまわれがちです。保護者、特に母親  
 たい こ かた か もと けっか きつおんはっしょう  
 に対して子どもへのかかわり方を変えるように求められ、その結果、吃音発症の  
 げんいん よういくたいど ごかい ざいあくかん ほか  
 原因は養育態度によるものだと誤解し罪悪感をいだかせてしまいます。その他にも  
 しんけいしつ き よわ せいかく と ほんにん せいかく もんだい  
 「神経質で気が弱い性格ではありませんか？」と問われることで本人の性格に問題  
 があるのではないかと思ってしまうのです。吃音のあるお子さんのなかには、おし  
 やべりが大好きなことも 珍しくありません。ここで誤解されていることをいくつ  
 かあげておきます。

## 誤解されている「吃音」

口や舌がうまく動いて  
 いないから  
 言いたいことがたくさん  
 あって、あわてるから

親の子育てや愛情不足  
 習い事や何らかのストレス

神経質で気が弱い性格

緊張して話すから  
 早口で話すから

大人になれば自然に治る  
 訓練すれば治る  
 治らないし、何もできない

気にしないこと  
 周りが知らないふりを  
 すること

ゆっくり話しかけるとよい

他に何か自信をもたせる  
 のがよい

れきしてき けいか きつおん たい ごかい  
 歴史的な経過のなかで吃音に対する誤解がいまもなお

せけん しんどう おお ひと きつおん がくしゅう  
 世間に浸透しています。多くの方が吃音について学習する

きかい りかい おくら  
 機会がなかったためです。理解を遅らせてしまっている

げんじょう  
 現状がここに 있습니다。



## 5. 吃音の言語症状

「どもる」というと、「ぼ・ぼ・ぼ・ぼくは」のように、ことばの最初をくり返し  
て言う「連発」のイメージがあります。ドラマ『裸の大將』として知られる山下清  
さんにふんする芦屋雁之助さんのしゃべり方だと思っているご年配の方は少なくな  
いでしょう。吃音にはその他に、ことばを伸ばして言う「伸発」や声が詰まってなか  
なか出せない「難発」の症状があります。そして、これらは連発から吃音症状が  
進行していった結果であることはあまり知られていません。

さらに、吃音症状は、それが目立つ時期と目立たない、または現れない時期が  
あります。1日の中で変わってしまう人もいますし、数ヶ月から数年をかけて変化す  
る場合もあります。これを、吃音症状の「波」といいます。

吃音症状は、話し方にだけ現れるものではありません。特に「難発」の状態  
は、喉の辺りがしめつけられるかのような、息が詰まる苦しさを伴うことがありま  
す。そして言いたくてもことばを出せないために、この状態からなんとか抜け出そ  
うと試みます。タイミングを見計らいながら「エイ！」と足を踏み込んで言おうと  
したり、身体を大きく動かしたり、手を振り下ろしたり、口の周辺に力を入れたり  
します。お子さんのなかには飛び上がりながら言おうとする姿がみられることもあ  
ります。こうした一連の行動を「随伴症状」と言います。これは「どもらないで話そ  
う」とするあまり、その努力の結果生じるものなのです。本人のこうした努力によ

って「<sup>れんぱつ</sup>連発」や「<sup>しんぱつ</sup>伸発」がみられなくなったことで、「<sup>なほ</sup>どもらなくなった」「<sup>なお</sup>治った」とまわりの人は<sup>ひと</sup>考<sup>かんが</sup>えてしまいがちです。本人の<sup>ほんにん</sup>努力<sup>どりよく</sup>はますます<sup>くる</sup>苦<sup>じょうたい</sup>しい状<sup>か</sup>態へと変わっていきます。放置<sup>ほうち</sup>したままにしておく<sup>きつおんしょうじょう</sup>と吃音症<sup>しんこう</sup>状<sup>あつか</sup>はさらに<sup>しんこう</sup>進<sup>あつか</sup>行(悪化)していき<sup>あつか</sup>ます。また、話<sup>はな</sup>しづらさが<sup>つよ</sup>強<sup>つよ</sup>まり、どもり<sup>べつ</sup>そんなことばを<sup>べつ</sup>別<sup>お</sup>のことばに<sup>か</sup>置<sup>か</sup>き換<sup>か</sup>えたり、  
い<sup>はな</sup>言<sup>はな</sup>うことそのものをやめてしまったり、話<sup>はな</sup>す場<sup>ば</sup>を<sup>さ</sup>避<sup>さ</sup>けようとしたりする<sup>こうどう</sup>行<sup>ふ</sup>動が増<sup>ふ</sup>えて<sup>ふ</sup>きます。これを「<sup>かいひこうどう</sup>回<sup>かい</sup>避<sup>ひ</sup>行動」とい<sup>い</sup>います。上<sup>う</sup>手<sup>まく</sup>く回<sup>かい</sup>避<sup>ひ</sup>する<sup>きつおんしょうじょう</sup>ことで吃音症<sup>め</sup>状<sup>だ</sup>は目<sup>め</sup>立<sup>だ</sup>た<sup>め</sup>なくなり<sup>め</sup>ます。その<sup>め</sup>た<sup>め</sup>め、ま<sup>め</sup>わ<sup>め</sup>り<sup>め</sup>か<sup>め</sup>ら<sup>め</sup>は<sup>め</sup>い<sup>め</sup>っ<sup>め</sup>そ<sup>め</sup>う<sup>め</sup>目<sup>め</sup>立<sup>め</sup>た<sup>め</sup>な<sup>め</sup>く<sup>め</sup>なり<sup>め</sup>ます。目<sup>め</sup>の<sup>め</sup>前<sup>め</sup>の<sup>め</sup>人<sup>め</sup>が<sup>め</sup>ま<sup>め</sup>さ<sup>め</sup>か<sup>め</sup>吃<sup>め</sup>音<sup>め</sup>で<sup>め</sup>苦<sup>め</sup>し<sup>め</sup>ん<sup>め</sup>で<sup>め</sup>い<sup>め</sup>る<sup>め</sup>とい<sup>め</sup>う<sup>め</sup>こ<sup>め</sup>と<sup>め</sup>に<sup>め</sup>気<sup>め</sup>づ<sup>め</sup>く<sup>め</sup>余<sup>め</sup>地<sup>め</sup>す<sup>め</sup>ら<sup>め</sup>あ<sup>め</sup>り<sup>め</sup>ま<sup>め</sup>せ<sup>め</sup>ん。ま<sup>め</sup>わ<sup>め</sup>り<sup>め</sup>の<sup>め</sup>そ<sup>め</sup>う<sup>め</sup>し<sup>め</sup>た<sup>め</sup>反<sup>め</sup>応<sup>め</sup>と<sup>め</sup>は<sup>め</sup>う<sup>め</sup>ら<sup>め</sup>は<sup>め</sup>ら<sup>め</sup>に、<sup>ほんにん</sup>本<sup>ほん</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>ほん</sup>く<sup>ほん</sup>や<sup>ほん</sup>し<sup>ほん</sup>さ<sup>ほん</sup>・<sup>ほん</sup>つ<sup>ほん</sup>ら<sup>ほん</sup>さ<sup>ほん</sup>・<sup>ほん</sup>く<sup>ほん</sup>し<sup>ほん</sup>み<sup>ほん</sup>は<sup>ほん</sup>強<sup>ほん</sup>ま<sup>ほん</sup>っ<sup>ほん</sup>て<sup>ほん</sup>い<sup>ほん</sup>く<sup>ほん</sup>の<sup>ほん</sup>で<sup>ほん</sup>す。  
<sup>ししゅんき</sup>思<sup>し</sup>春<sup>しゅん</sup>期<sup>き</sup>あ<sup>あ</sup>た<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>で、<sup>じぶん</sup>ど<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>る<sup>も</sup>自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>を<sup>は</sup>恥<sup>ち</sup>ず<sup>ち</sup>か<sup>ち</sup>し<sup>ち</sup>く<sup>ち</sup>思<sup>おも</sup>い、「<sup>にんげん</sup>ダ<sup>だ</sup>メ<sup>め</sup>な<sup>な</sup>人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>だ」と<sup>じ</sup>自<sup>じ</sup>己<sup>こ</sup>評<sup>ひょう</sup>価<sup>か</sup>を<sup>ひく</sup>低<sup>ひく</sup>くし、  
<sup>だれ</sup>誰<sup>だれ</sup>に<sup>だれ</sup>も<sup>だれ</sup>相<sup>そう</sup>談<sup>だん</sup>で<sup>だれ</sup>き<sup>だれ</sup>な<sup>だれ</sup>い<sup>だれ</sup>ま<sup>だれ</sup>ま<sup>だれ</sup>孤<sup>こ</sup>立<sup>りつ</sup>し<sup>こ</sup>て<sup>こ</sup>し<sup>こ</sup>ま<sup>こ</sup>う<sup>こ</sup>じ<sup>こ</sup>う<sup>こ</sup>も<sup>こ</sup>あ<sup>こ</sup>り<sup>こ</sup>ま<sup>こ</sup>す。人<sup>じん</sup>格<sup>かく</sup>形<sup>けい</sup>成<sup>せい</sup>の<sup>じゅうよう</sup>重<sup>じゅう</sup>要<sup>よう</sup>な<sup>じき</sup>時<sup>じ</sup>期<sup>き</sup>に<sup>じき</sup>大<sup>お</sup>き<sup>お</sup>な<sup>お</sup>影<sup>えい</sup>響<sup>きょう</sup>を<sup>う</sup>受<sup>う</sup>ける<sup>う</sup>こ<sup>う</sup>に<sup>う</sup>な<sup>う</sup>り<sup>う</sup>ま<sup>う</sup>す。

こう<sup>いちれん</sup>した<sup>なが</sup>一<sup>なが</sup>連<sup>なが</sup>の<sup>なが</sup>流<sup>なが</sup>れ<sup>なが</sup>と<sup>なが</sup>は<sup>なが</sup>違<sup>ちが</sup>い、<sup>なんぱつ</sup>難<sup>なん</sup>発<sup>ぱつ</sup>か<sup>なん</sup>ら<sup>なん</sup>い<sup>なん</sup>き<sup>なん</sup>な<sup>なん</sup>り<sup>なん</sup>始<sup>ひと</sup>ま<sup>ひと</sup>った<sup>ひと</sup>とい<sup>ひと</sup>う<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>が<sup>ひと</sup>い<sup>ひと</sup>ま<sup>ひと</sup>す。この<sup>ばあい</sup>場<sup>ば</sup>合<sup>あい</sup>の<sup>おお</sup>多<sup>お</sup>く<sup>お</sup>は、<sup>お</sup>し<sup>お</sup>ば<sup>お</sup>ら<sup>お</sup>く<sup>お</sup>す<sup>お</sup>ると<sup>お</sup>落<sup>お</sup>ち<sup>お</sup>づ<sup>お</sup>き<sup>お</sup>て<sup>お</sup>き<sup>お</sup>ま<sup>お</sup>す。連<sup>れんぱつ</sup>発<sup>あらわ</sup>が<sup>あらわ</sup>現<sup>あらわ</sup>れ、<sup>つうじょう</sup>通<sup>しんてん</sup>常<sup>みち</sup>の<sup>みち</sup>進<sup>しん</sup>展<sup>てん</sup>の<sup>みち</sup>道<sup>みち</sup>を<sup>みち</sup>た<sup>みち</sup>ど<sup>みち</sup>る<sup>みち</sup>場<sup>ば</sup>合<sup>あい</sup>や<sup>しぜん</sup>自<sup>し</sup>然<sup>ぜん</sup>に<sup>しょうしつ</sup>消<sup>しょう</sup>失<sup>しつ</sup>す<sup>しょう</sup>こ<sup>しょう</sup>も<sup>しょう</sup>あ<sup>しょう</sup>り<sup>しょう</sup>ま<sup>しょう</sup>す。

また、「あ<sup>つぎ</sup>あ、<sup>つぎ</sup>次<sup>つぎ</sup>の<sup>つぎ</sup>こ<sup>つぎ</sup>と<sup>つぎ</sup>ば、<sup>つぎ</sup>ど<sup>つぎ</sup>も<sup>つぎ</sup>り<sup>つぎ</sup>そ<sup>つぎ</sup>う<sup>つぎ</sup>だ」「あ<sup>い</sup>あ、<sup>い</sup>言<sup>い</sup>い<sup>い</sup>に<sup>い</sup>く<sup>い</sup>い<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>で<sup>い</sup>は<sup>い</sup>じ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>っ<sup>い</sup>て<sup>い</sup>い<sup>い</sup>る<sup>い</sup>…」<sup>い</sup>とい<sup>い</sup>う<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>う<sup>い</sup>に、<sup>ばめん</sup>ど<sup>さき</sup>も<sup>よ</sup>り<sup>そく</sup>そ<sup>そく</sup>う<sup>そく</sup>な<sup>そく</sup>こ<sup>そく</sup>と<sup>そく</sup>ば<sup>そく</sup>や<sup>そく</sup>場<sup>そく</sup>面<sup>そく</sup>を<sup>そく</sup>先<sup>そく</sup>に<sup>そく</sup>予<sup>そく</sup>測<sup>そく</sup>し、<sup>そく</sup>ド<sup>そく</sup>キ<sup>そく</sup>ド<sup>そく</sup>キ<sup>そく</sup>し<sup>そく</sup>ま<sup>そく</sup>す。  
そ<sup>おも</sup>して、「<sup>おも</sup>や<sup>とお</sup>っ<sup>とお</sup>ぱ<sup>とお</sup>り<sup>とお</sup>思<sup>お</sup>った<sup>お</sup>通<sup>お</sup>り<sup>お</sup>ど<sup>お</sup>も<sup>お</sup>っ<sup>お</sup>て<sup>お</sup>し<sup>お</sup>ま<sup>お</sup>った」と<sup>けいけん</sup>い<sup>けい</sup>ん<sup>けい</sup>験<sup>けん</sup>か<sup>けん</sup>ら、<sup>ふあん</sup>さ<sup>たか</sup>ら<sup>たか</sup>に<sup>たか</sup>不<sup>ふ</sup>安<sup>あん</sup>が<sup>たか</sup>高<sup>たか</sup>ま

っていきます。これを「**予期不安**」と言います。年齢があがるにつれて、本人が吃音をかくそうとしたり、まわりに気づかれないようにと考えたりしているために、授業を落ちついて聞けなくなってしまう人もいます。こうした様子は、まわりから「緊張していそう」「自信なさそう」「不安そう」と、とらえられてしまいやすいのです。

このように、吃音とは単に「どもる」ということだけではなく、「**感情**」「**態度**」「**暮らし**」をあわせて考えていかなければならないのです。

## 6. 吃音のある人の相談

**どもり始めることを「発吃」と言います。**何歳ごろからどもり始めるのかを調べた研究では、発吃するもっとも多い時期は2歳から4歳、次に6歳から7歳という報告があります。つまり、小学校の入学前からどもり始めているのです。お子さんがどもりはじめたことに気づいた保護者の反応はさまざまです。「まだ小さいからうまく話せないだけ」「そのうち治る」と、心配することもなく、そのまま過ごそうという保護者もいれば、比較的早い段階で専門機関を探し、相談に訪れる保護者もいます。

こうした時期、すなわち2、3、4歳ごろに、吃音の相談に出向かれた場合、「成長とともに治っていく様子を見ましょう」と言われてしまうことが圧倒的に多いのです。これは、約5%にみられる吃音症状は、人口全体みると1%となり、約8割が自然

に治るとい**う現象**があるためです。つまり、**実際**はかなりの人が大人になるまでの

間に**吃音**が消失してしまう**可能性**があるということです。ですが、目の前にいる人

の**吃音症状**がその後どうなっていくかは、**たとえ吃音の専門家といえども、予測す**

**ることは難しい**のです。自然に治ってしまう**8割**の群に属するのか、残りの約**2割**に

属し、**吃音**を持ったまま大人になっていくのかは**分からない**のです。これまでの**時間**

の経過のなかで、**吃音症状**を伴いながら他の子どもたちと**過ごす間**、まわりの子

どもたちは**話し方の特徴**に注目します。そして**ストレートに指摘**してきます。悪気

はありません。「どうしてそんな**話し方**をするの」「どうして**何回も言う**の」「**へんな**

**言い方**」「ちゃんとしゃべってよ」と。言われた本人はもともと**話し方**を気にしてい

るわけでは**ありません**。まわりからの**指摘**されるたびに**次第に気**になっていくのです。

**3歳**の子どもさんが、自分の**話し方**に**意識**を向けていることは、**決して珍しいこと**

ではありません。しかし、**保護者**や**先生方**はそのことに**気づきにくい**のです。「**友達か**

らことばのことで**言われていない**？」と本人に問うたところで、「**言われてない**」と返

されてしまうのが**常**です。もし「**言われている**」と**答えた**なら、それはまわりからの

**指摘**をかなり受けており、**相当困っている状態**であるかもしれません。「**言われてな**

**い**」と**返答**した場合は**問題**が小さいという**訳**ではありません。正面から「**言われた**

りしていない？」と問われると、たとえ**そうであった**としても「はい」とは**肯定しづ**

らい**もの**です。本当のところを聞き出すための**テクニック**が必要です。



しぜん で て れんぱつ はやく みと かんきょう  
＜自然に出てくる「連発」をできるだけ早くそのまま認められる環境づくりを＞

きつおん しょう ねんれい はつきつ じ き さい ほんにん なに いしき  
吃音が生じる年齢（発吃時期）はおおよそ2歳からです。本人は何も意識してい

ないようにふるまっていますが、<sup>い が い ほんにん わか</sup>意外と本人は分かっているという**場合が多い**のです。<sup>ばあ い おお</sup>

さい こ はな かた とくちょう してき き  
3歳になればまわりの子どもたちが話し方の**特徴**を指摘され、**気づき**はじめます。

き いちじ きやす  
「**気にしないでいいよ**」「**だいじょうぶだからね**」は、一時しのぎの**気休め**にしかな

りません。「〇〇ちゃんはね、いまみたいに、『あ・あ・あ・ありがとう』ってなるよ

ね。それって、**たくさん**そうになってしまう**子**と、**あんまり**ならない**子**がいるんだよ。

でもね、そのままでいいから**お話し**いっぱいしてね。**だんだん**少なくなってくるんだ

って」といったように、<sup>はな かた わだい はな</sup>話し方そのものを**話題**にし、「そのまま話していても**だいじ**

<sup>おとな せんげん</sup>ょうぶだから」と**大人**が**宣言**してあげることです。

きつおん ひと れんぱつ しぜん しょう  
吃音のある人にとっては、「あ・あ・あ・ありがとう」のような「**連発**」は**自然**に**生**

じてくるものなのです。そして、この時期は、「**連発**」を出さないように**話そう**とす

ればそのようにできます。そうした**修正**の方法として**カミ**や**息吸い**といった**誤った**

<sup>はっせいほうほう み きょうか なんぱつ しょう</sup>発声方法を身につけていくと、それが**強化**され、やがては「**難発**」が**生じて**きます。

ちゅうかん しんぱつ れんぱつ だ しゅうせい けっか  
その**中間**にあるのが「**伸発**」であり、**連発**を出さないように**修正**した**結果**のもので

す。「**連発**」は、いざとなれば**修正**することは**難しく**はありませんが、「**難発**」は**困難**

<sup>どうじ ふあん きも たか きつおんしょうじょう だいひょう</sup>です。同時に**不安**な**気持ち**が高まっていきます。まずは、**吃音**症**状**の**代表**である

れんぱつ しぜん しょう い  
「**連発**」を**自然**に**生じて**くるものとして、「そのまま**言**っても**だいじょうぶ**」という

せんげん                      かんきょう                      かぞく                      しんるい                      かくにん                      ひつよう  
宣言と、そうした環境をご家族や親類のあいだで確認しておくことが必要です。

せんせい                      きょうりょく                      こ                      きつおん                      し  
＜先生と協力して、まわりにいる子どもたちに吃音を知ってもらうこと＞

れんぱつ                      しぜん                      しょう  
「連発」は自然に生じてくるものとして、「そのまま言ってもだいじょうぶ」とい  
かんきょう                      まわ                      とも                      し                      ひつよう  
う環境を周りにいる友だちやきょうだいに知っておいてもらう必要があります。  
きつおんしょうじょう                      してき                      いえ                      なか                      そと                      こ                      りき                      れんぱつ                      ともな  
吃音症状の指摘は家の中と外だからです。お子さんが、力みのない「連発」を伴っ  
ておしゃべりしているのであれば、まわりからの指摘がほぼ無いか、本人が平気でい  
かんきょう                      ととの                      かのうせい                      しんぱつ                      とく                      なんぱつ                      ぞうか  
られる環境が整っている可能性があります。「伸発」や、特に「難発」が増加して  
きている場合は、まわりからの指摘はない、と考えるには無理があります。例外的に、  
さいしよ                      なんぱつ                      しょうじょう                      しめ                      こ                      おお                      れんぱつ                      はじ  
最初から「難発」の症状を示す子どもさんはいますが、多くは「連発」から始まる  
ひょうじゆんてき                      しょうじょう                      すす                      かた                      りゆう                      ほんにん                      どりょく                      はな                      かた                      しゅうせい                      たいしよ  
標準的な症状の進み方です。その理由は、本人の努力による話し方の修正（対処）  
なのです。

まわりの子どもたちに伝えていく際の注意や配慮は、掲載してあります参考図書を  
かつよう                      ようてん  
ご活用ください。要点は2つあります。

め  
1つ目は、

①口や舌など、話すのに使う器官はみんなと同じで何ら違いはないということ。

②緊張やあわてて話すことが理由ではないということ。

③世界で研究が進んでいるにもかかわらず、まだ吃音の原因は分かっていないと

いうこと。

2つ目は、

①自然に生じる「連発」は、そのまま言っても増加していくことはなく、むしろ次第に減少していくことが多いということ。

②連発を出さないように気をつけて話そうとすると、力んでしまいがちになり、やがて、すんなり言えなくなってしまう恐れがあること。

「連発」をそのまま出して話してだいじょうぶということをまわりに知ってもらうことが重要です。世間には100人に1人ぐらいのが吃音とともに暮らしていて、人前で話す仕事をしている人もたくさんいるという事実を大人（先生方）が伝えていきます。そして、園や学校で気兼ねなく話せる環境をできるだけ早くつくっておくことが重要です。

### <言語聴覚士などのことばの専門家と連携する>

不安なことがあったり、力んだ言い方が増加してきたりしているようでしたら、ことばの専門家（吃音を専門にしている言語聴覚士であること）に早急に相談しましょう。ことばの教室があるようでしたら担当の先生に相談してみましよう。ただし、言語聴覚士やことばの教室の先生だからといっても必ずしも吃音を専門としているかどうかは分かりません。尋ねるようにしましょう。場合によっては吃音を専門にしている人を紹介してもらいましょう。

## ＜吃音のあるお子さんの家庭でのかわり方＞

○お子さんの話し方が最初は気にはなりません。話の中身を聞き取ろうとしてあげてください。

○お子さんのお話を途中でさえぎらないように最後まで聞いてあげましょう。次のことばがなかなか出てこないときは、少し待ってから、「～がどうしたってこと？」のように、次につながりやすいことばをそえてみるのも良いです。「先にいわないで」「言いたかったのに」と言われたときには「ごめんね」とあやまれば良いことです。ただただ待つことばかりが良いというわけではありません。いずれにしても話の中身にしっかり耳を傾けてあげてください。

○「連発」の言い方に対して、「ゆっくり」「落ち着いて」「もう1回言ってみて」の声かけは要りません。ですが、とてもあわてて言おうとしていたり、力んでいるときは、「もうちょっと落ち着いて」「力をぬいて」と伝えてあげても良いです。

○自然にでてくる「連発」はそのまま出しておいても大丈夫だということをお子さんに伝えておくことも安心につながります。

○学校の音読や発表で困っていないか、いやがっていないかを保護者が感じ取るようにしながら、学校で配慮してほしいことはないかを話し合ってみましょう。「教室で指名されないようにして欲しい」という時期が出てくるかもしれません。それを尊重します。「いまは良くて将来のためにならないのでは」と決めつけ

みかた  
た見方をしないことです。

げき  
○劇のセリフを言いやすいことばにかえたり、おんどくとも  
いっしょよ  
音読は友だちと一緒に読んだりするこ  
らく  
とで楽になることがあります。さまざまなかんが  
くふう  
工夫を考えていきます。

こ  
○お子さんが困っていそうなことやふあんかん  
不安に感じていることを、ほごしやはな  
保護者に話してもらえ  
きつおんわだい  
るように、吃音の話題をタブーにせず、ひごろ  
きつおんはなし  
日頃から吃音の話をお子さんとできてい  
かんきょう  
る環境をつくっておきます。

## えん がっこう せんせいがた 8. 園や学校の先生方に

せんせいがた きつおん たい ただ ちしき  
まずは、先生方が吃音に対する正しい知識をもってください。そして、きつおん  
あるお子さんときつおん  
きつおんかん  
ことや吃音に関する困りごとをらくはな  
楽に話せるようなかんけい  
関係をつ  
くっていきます。どうすればはな  
いっしょかんが  
話しやすくなるのかを一緒に考えていきます。そして、  
きつおん  
きつおんしょう  
まえ  
吃音のまねやからかいが生じてしまう前に、まわりにいる子どもたちにただきつおん  
正しい吃音  
ちしき がくしゅう  
きかい もう  
の知識を学習をする機会を設けます。つまり、子どもたちのぎもん  
疑問にきちんとこた  
答える  
ためのじゅぎょう  
授業を組んでいきます。そのことがきつおんしょうじょう  
あつかふせ  
吃音症状の悪化を防ぎ、あんしん  
安心したがっこう  
学校  
せいかつ く  
ちよっけつ  
生活（暮らし）に直結します。きつおん  
吃音のあるお子さんにも、  
きつおん  
し  
きつおん  
吃音のことを知ってもらい、まわりのひと  
つた  
人に伝える  
い み ほうほう いっしょ ふか  
意味や方法を一緒に深めています。



## 9. ことばの専門家（吃音を専門にしている言語聴覚士など）

どんな吃音も治せるものであるなら、それを目標にしても良いでしょう。ですが、個々のお子さんの吃音が治ってしまうものかどうかは専門家であってもかならずしも分からないのです。

ことばを専門にしている専門職である言語聴覚士は、吃音のお子さんに言語指導をおこないます。その1つが吃音症状への介入です。しかし、吃音の問題は、「ことばがなめらかに話せない」と「そのことで周囲からのどのように思われるか」、そして「本人がそのことをどのように受け止めているか」という3つが関係しています。つまり、お子さんが、かなりどもりながら話されていたとしても、周囲がそのことを寛容に受け入れていて、本人もどもりながらものびのびと話していれば、問題は小さいといえます。逆に、それほどひどくはもっていないくても、保護者が「この子はどもっているから恥ずかしい」と考えていたり、お子さん自身がそ保護者の方の気持ちを察して「自分の話し方はダメだ」と思っていたりすると、次第に話すことが嫌いになっていくでしょう。これは深刻な問題です。

このように、吃音の問題は、単にことばの流暢性（なめらかさ）や効率性（スムーズさ）の問題だけではないことを踏まえ、幼児期から学齢期の子どもさんの言語指導では、

- ① 保護者や保育園・幼稚園・学校の先生に、また本人にも吃音のガイダンス（正し

い知識とかかわり方を伝えること) や生活の困りごとの対処を一緒に考えていきなが

ら、同時に吃音に対して寛容な態度と、吃音のあるお子さんとご家族が暮らしやすい

環境づくりを支援していきます。そのための要になるのが、園や学校のクラス、学年、

習い事の場合で一緒にいる友達に、吃音について知ってもらい、かかわり方を学べるミ

ニ学習会を設けてもらいます。

② お子さんの不安を軽減し、ご自身が肯定的な認識を持てるように、本人の吃音の

受け止め方を支援していきます。

③ 難発のために言葉が出ない状況が続く場合には、楽な話し方の練習をしていきます。

④ 吃音のある人と出会い、話せる機会を設けたり、保護者同士が子育ての悩みを話せたりできる場を提供していきます。

これらを状況に合わせて回数や期間を設定していきます。

## 10. 参考図書と関連ホームページ

吃音のお子さんの指導・支援について、よりくわしく知りたい方や学びたい方は

以下の参考図書やホームページをご参照ください。

### <参考図書>

「キラキラ どもる子どものものがたり」 堅田利明 海風社 2007

「吃音のある子どもたちへの指導 子どもに届けるメッセージ」 青山新吾著 明治書店 2009

- 「<sup>がくれいき</sup>学<sup>きつおん</sup>齡<sup>しどろ</sup>期<sup>しえん</sup> 吃音の指導・支援 ICF に基づいた評価プログラム」 小林宏明著 学苑社 2013
- 「<sup>とくべつしえん</sup>特別支援を<sup>むづか</sup>難しく<sup>かんが</sup>考えないために」 堅田利明 海風社 2011
- 「エビデンスに基づいた<sup>もと</sup>吃音<sup>きつおん</sup>支援<sup>しえん</sup>入門」 菊池良和著 学苑社 2012
- 「<sup>きつおん</sup>吃音のこと、わかってください クラスがえ、<sup>しんがく</sup>進学、<sup>しゅうしょく</sup>就職、<sup>どもるとき</sup>どもるとき、<sup>どうしてきたか</sup>どうしてきたか」  
北川敬一著 岩崎書店 2013
- 「<sup>とくべつしえん</sup>特別支援<sup>きつおん</sup>教育における吃音・<sup>りゅうちやうせいしやうがい</sup>流暢性障害のある<sup>こ</sup>子どもの<sup>りかい</sup>理解と<sup>しえん</sup>支援」  
小林宏明・川合紀宗編著 学苑社 2013
- 「<sup>ぞくへん</sup>続編 キラキラ <sup>どもる子どものものがたり</sup>少年<sup>しょうねん</sup>新一<sup>しんいち</sup>の<sup>せいちやうき</sup>成長記」 堅田利明 海風社 2013
- 「<sup>きつおん</sup>吃音のリスクマネジメント」 菊池良和著 学苑社 2014
- 「<sup>しょうにきつおんりんしやう</sup>小児吃音臨床のエッセンス」 菊池良和編 学苑社 2015
- 「『<sup>きつおん</sup>吃音』の<sup>ただ</sup>正しい<sup>りかい</sup>理解と<sup>けいはつ</sup>啓発のために—<sup>キラキラ</sup>キラキラを胸に」 堅田利明 海風社 2018

※センターにも<sup>さんこうとじょ</sup>参考図書<sup>お</sup>を置いてあります。

## ＜<sup>かんれん</sup>関連ホームページ＞

- 吃音ポータルサイト 小林宏明のホームページ : <http://www.kitsuon-portal.jp>
- NPO 法人全国言友会連絡協議会ホームページ : <http://www2m.biglobe.ne.jp/~genyukai/>
- 日本吃音・流暢性障害学会 : <http://www.jssfd.org/>
- Stuttering Foundation Home Page : <http://www.stutteringhelp.org/>
- ISA : <http://www.isastutter.org/>
- IFA : <http://www.theifa.org/>

※本ホームページは、関西外国語大学 准教授 堅田利明先生（言語聴覚士）の御協力を得て作成しました。

また、本文は「<sup>ことば</sup>言葉と<sup>じ</sup>自己<sup>こじつげん</sup>実現—<sup>きつおん</sup>吃音の<sup>しゃかいけいはつ</sup>社会啓発に向けて—」<sup>む</sup>人権を<sup>む</sup>考える第19号  
2016年3月 関西外国語大学 堅田利明 から引用しています。

<sup>きつおん</sup>吃音<sup>かた</sup>のある<sup>かぞく</sup>方<sup>あんしん</sup>やご家族が安心して

く<sup>ちいきしゃかい</sup>暮らせる<sup>ちいきしゃかい</sup>地域社会に

